

2023年度 第1回番組審議会議事録

1. 開催年月日 : 2023年 9月 26日 (火)
2. 開催形式 : 書面開催
3. 委員の参加 : 参加委員数 6名 / 委員総数 7名
書面提出者 : 瀬戸純一委員長、関沢英彦委員、天城鞆彦委員、中浩正委員、
酒井順子委員、服部洋之委員
書面未提出者 : 野田慶人委員
4. 審議対象チャンネル : Super! drama TV HD
5. 議題 : 番組審議
＜審議対象番組＞
 - ・「LAW & ORDER 性犯罪特捜班 シーズン 15」 第1話 【字幕版】
 - ・「ブラックリスト ファイナル・シーズン」 第1話 【字幕版】

6. 審議内容

＜「LAW & ORDER 性犯罪特捜班 シーズン 15」 第1話 【字幕版】について＞

- ・最近のシリーズの中では衝撃あるストーリー展開になったのではないかと感じる。また近年の性犯罪における心理学的視点を十分に勘察し、人間の葛藤を十分に描いている。映像技法も、見るものを違和感なく、かつ無意識に引きずりこむ。単なるエンターテインメント作品と言いきれるものではない重層性にあふれている。
- ・実に良く出来たドラマだと思う。息もつかせぬダイナミックなストーリー展開と、主人公の深層心理に切り込む奥行き深い葛藤劇は、究極のドラマとも言えよう。しかし視聴者としては、私はこのドラマを見たいとは思わない。様々な形で性加害が社会的に広く断罪されている中で、性加害を肯定していると受け止められかねないストーリーをいつまで放送し続けるのかと、アメリカのテレビ業界の能天気にも呆れる。
- ・捕らわれた女性警察官、ベンソンを救出すべく警察の総力をあげて動く冒頭からのスリリングな展開は、なかなかの迫力。ただ米国の性犯罪事情、司法制度に通じていない身には、今一つフィットしない思いが残るのは否めない。また「性犯罪の心理をより深く追求し、人間にとってのセクシャリティーの役割を検証したい」というコンセプトについても、今作品に関しては明確に伝わってくるとは言い難い。
- ・この第1話については「楽しめる」という気持ちを持てなかった。犯罪学や拘禁の心理についての「素材」として視聴することはできる。しかし、居間でくつろいで見るエンターテインメントとは感じられない。「LAW & ORDER」は面白かった。女性視聴者の反応はどのようなものか。
- ・女性刑事が性犯罪者に拉致されるということで、シリーズに親しみを持つ人にとってはショッキングな導入部だったのではないかと感じる。解放された後の女性刑事の行動に様々な謎が残り、その謎を解明したい気持ちにもなるものの、気分の悪さを思い起こすと、続けて見ることに辛さを覚える人もいるように思った。性犯罪に至るまでの背景、どのような行為が性犯罪となるのか、また被害者にならないためにはどうすればいいのを知るためにも、このようなドラマは日本でも必要となってくるのかもしれない。

- ・ほんとうによいドラマ。初期のころから見続けている。一話完結なので、見落としがあっても不都合はない。日本ではどうも望めないシビアなテーマもあり、いつも感心している。長続きするのは当然。

<総括>

ロングラン・ヒットドラマ「LAW & ORDER」のスピノフ作品。安定した視聴率を稼いでいるなじみ深いシリーズだけあって、息もつかせぬダイナミックなストーリー展開と、登場人物の深層心理に切り込む奥行き深い葛藤劇は、完成度の高い究極のドラマといえる。映像技法的にも優れた作品だ。ただ、この「LAW & ORDER 性犯罪特捜班 シーズン 15」に関しては、「見たいとは思わない」「楽しめない」という委員が少なからずいたことも、注記しておく必要がある。深刻、かつセンシティブなテーマだけに、気軽に楽しめる「エンターテインメント作品」と割り切るわけにはいかないにしても、あまりに衝撃的、刺激的な場面の連続で、専門家でも研究者でもない一般視聴者が、「気分が悪くなってくる」のは自然なことであり、「あえて見ない」選択をする人も少なくないかもしれない。委員からは、「米国ほどではないが日本における性犯罪の凶悪性は増大傾向にあり、エピソードを反面教師として認識していくことに適している」との意見がある一方、「様々な形で性加害が社会的に広く断罪されている中で、性加害を肯定していると受け止められかねないストーリーをいつまで放送し続けるのかと、アメリカのテレビ業界の能天気にも呆れる」との声もあった。作品の評価は分かれるが、性犯罪に対する見方が大きく変わってきている今、この問題に関わる議論は、避けて通るわけにはいかない。性犯罪をテーマにした工夫を凝らしたシリアスなドラマが日本でも必要となってくるのではないか。

<「ブラックリスト ファイナル・シーズン」第1話【字幕版】について>

- ・表層的な日常社会における法令遵守的な存在とその法を全く無視できる深層存在が入り乱れる現代社会、現代世界の恐ろしさを至るところで感じさせるドラマだ。昨今、分断が拡大する東西問題、南北問題、イデオロギー問題、中露問題、あらゆる現代の生きづらさを代弁していると感じる。
- ・犯罪者とスパイと捜査機関の永遠のバトルが快適なテンポで見事に描かれている秀作シリーズと言える。レッドやクーパーなどの常連に加えて、新たに登場し、ひたむきな表情が好感できるシーアがファイナル・シーズンのカギとなる働きをするのか注視したい。
- ・個性的で多彩な登場人物を手際よく描き分け、息もつかせぬストーリーを展開する本作品は、さすがに10年間もファンを魅了し続けた大ヒットシリーズだけあって、見る者を魅了する。設定は、荒唐無稽に近いが、ありえなくもないと思わせる程度の現実性があり、それが作品の独特の魅力にもつながっている。「最大の謎」、レイモンド・”レッド”・レディントンは、依然として分かりにくい行動が多く、まだ謎のままだが、何か起きていたことは、自ら匂わせており、果たしてどんな結末を迎えるのか、興味は尽きない。
- ・シリーズ全体の構図が分かっても、「謎」が「謎」を呼んで、先を見たくなる。本作品は、時代を反映して、アメリカ・中国の関係が背景にあり、どちら側も複雑な事情を抱えているようで引き込まれる。今回も、ジェームズ・スペイダーの存在感が作品を締めてくれるのが嬉しい。諜報関係で働いていた母親を殺された娘が、同じ職業に志願する場面は、双方の思いが表れていて、なかなか良かった。
- ・ニューヨークの平和な美術館の光景から一転して、9.11を思い起こさせる建物の爆破という冒頭のシーンから、物語に引き込まれた。アメリカと中国の対立という、現代の国際社会の大きな問題が組み込まれ、見応えのあるドラマとなっていくそう。FBIの情報屋というレッドの役柄に、俳優の持ち味が合っていて、このドラマの軸となっている。
- ・J・スペイダーはクセのある役者で、それが魅力でもあり、弱点でもある。かなり凝った作りなので、話の展開や収束にしばしば無理が見られるが、制作者の苦勞がしのばれて好感が持てる。

<総括>

10年間、多くの視聴者を魅了し続けてきた「ブラックリスト」の最後のシリーズとなる作品。様々な問題を抱える米国社会、分断と対立が拡大する国際社会を背景に、犯罪者とスパイと捜査機関の永遠のバトルが、快適なテンポで展開されている。個性的で多彩な登場人物も手際よく描かれており、過去のシリーズを見ていない視聴者でも、それなりに楽しめるものになっている。中国系の暗殺者ウージンが狙う標的、「ナイトオウル」はピカソの彫刻ではなく、拘束されたテロリストのコードネーム、ピカソ作品を保管するはずの高級美術品輸送・保管会社は実は米国・英国等の同盟国が共有する秘密の収容所、といった設定は、荒唐無稽に近いが、ありえなくもないと思わせる程度の現実性はある。これに限らず、かなり凝った作りをしているので、話の展開や収束にしばしば無理が見られるが、それが一方で、作品の独特の魅力にもつながっている。レイモンド・”レッド”・レディントンを演じるジェームズ・スペイダーはさすがの存在感。レッドやクーパーなどの常連に加えて、新たに登場した魅力的な女性、シアアが、これからどう絡んでくるのか。シリーズ「最大の謎」レッドの正体は、依然「謎」のままであり、「謎」が「謎」を呼ぶスリリングな展開は、ファイナル・シーズンでも変わらない。10シーズンに渡る長い物語が、最後の最後にどのように幕を下ろすのか、興味は尽きない。

<事業者回答>

今後の番組編成の参考にさせていただく。

以上

2023年度 第2回番組審議会議事録

1. 開催年月日 : 2023年 9月 27日(水)
2. 開催場所 : 株式会社東北新社 会議室(東京都港区赤坂 4-8-10)
3. 委員の出席 : 委員総数 7名 / 出席委員数 5名
出席委員 : 芥川麻実子委員長、中嶋貞治委員、岩佐陽一委員、
武内智雄委員、村本理恵子委員
書面参加の委員 : 中町綾子委員、岩本昭治委員

放送事業者側出席者氏名 :

<株式会社東北新社メディアサービス>
倉元健児取締役

<株式会社ファミリー劇場>(ファミリー劇場 HD)
柳田昌賢代表取締役社長、渡邊潔巳 GM、深谷幸司

4. 審議対象チャンネル: ファミリー劇場 HD
5. 議題 : 番組審議
<審議対象番組>
・「今野敏サスペンス 警視庁強行犯係・樋口顕 Season2」

6. 審議内容

- <「今野敏サスペンス 警視庁強行犯係・樋口顕 Season2」について>
- ・原作の今野敏のストーリーが面白く、サスペンスとして深く、いい作品。
 - ・内藤剛志などベテランの俳優を使って重厚なサスペンスドラマになっている。
 - ・数多くある刑事ドラマのなかでも、事件に関わる人を広い人物相関図の中で捉えている点、主人公の家族が抱える問題を描いている点に特徴がある。多くの刑事ドラマを放送してきたファミリー劇場にふさわしい作品。
 - ・出演される俳優陣だけでなく、スタッフである演出の方など名のあるかたで、この方の演出なら間違いなく面白いだろうと鑑賞前から期待でき、実際に鑑賞後の満足感はとても高い。
 - ・前半の伏線が後半で解明されていく爽快感を感じた。
 - ・地上波での初回放送からまだ間もない作品だが、職場でのパワハラなどの描き方は、放送時と今とでは受け止め方は変わってきているかもしれない。「昔」の表現とは割り切れないので生々しく感じられた。
 - ・登場人物、ストーリーともに複雑で、相関関係を自分のなかで消化してから再度見ることで理解できたが、一度では理解できないところがあった。
 - ・主人公である内藤さんのキャラクターがちょっと弱いように感じた。演出で内藤さんの良さをもう少し

出せたのではないか。

- ・出てくる役者が他作品でも似た役柄を演じている印象があり、若干混同した。

<番組編成に関する意見交換>

- ・リアルタイムの放送では見られないという人を取りこぼさない。視聴者のライフスタイルにあわせる柔軟性が今は必要。見逃し視聴は積極的に取り組むべき。配信は今や年配層にも浸透してきている。
- ・サスペンス、ミステリーなどの作品がたくさんあるなかで、特集の組み方などキャッチをとっても考えて編成されていると感じた。そのキャッチによって他チャンネルとの差別化だったり、作品の深さを表現したりすることで、そこからオリジナリティというものが出せると考える。
- ・地上波で2時間サスペンスを視聴することが難しくなった今、2時間サスペンスを視聴したい層は一定数必ずいる。2時間サスペンス専門局というのがあるだけでも需要はあるだろう。
- ・サスペンス、ミステリー漬けといえる編成も悪くないが、オリジナル制作番組も歴史と経験を積み重ねて良くなってきている。人気作品の調達に偏って放送局としてオリジナル制作番組の本数を減らすことには疑問を呈せざるをえない。
- ・作品は見てもらってこそだとは思う。自社のコンテンツはソフト不滅の法則、そこに立ち返るべきではないか。
- ・CS放送はマニアック度高いプラットフォームではないか。マニアックさも忘れずにいてほしい。

<事業者回答>

- ・今後の番組編成の参考にさせていただく。

以上

2023年度 第3回番組審議会議事録

1. 開催年月日 : 2023年 9月 28日(木) 13:00~14:30
2. 開催場所 : 株式会社東北新社 会議室 (東京都港区赤坂 4-8-10)
3. 委員の出席 : 委員総数 7名 / 出席委員数 5名
出席委員の氏名 : 小池保 委員長、渡辺祥子 委員、渡辺純一 委員、藤森益弘 委員、田久保敏 委員
欠席委員の氏名 : 谷口恭子 委員、横山宗嘉 委員

放送事業者側出席者氏名 :

<株式会社東北新社メディアサービス>

漆原 弘子 代表取締役社長

<AXN株式会社 ザ・シネマ事業部>

榎本 豊 ゼネラルマネージャー、小林 淳(事務局)

4. 審議対象チャンネル: ザ・シネマ HD

5. 議題 : 放送企画審議

<審議対象放送企画>

- (1) 放送企画: 「ワーナー・ブラザース 100周年連動企画」
- (2) 放送企画: 「【4か月連続】Kシネマ GUIDE」

6. 審議内容

(1) 放送企画: 「ワーナー・ブラザース 100周年連動企画」

- ・「メジャーだから」「100周年だから」のどちらの比重が高かったか？
→「メジャーだから」が大きい。
- ・コロンビア映画も来年 100周年なので取り上げたらどうか
→来年予定している。現在ライセンサー側と作品購入交渉の中で話し合っている。
→今回ワーナーとの取り組みを見てソニーもぜひ、という話になっている。
- ・23年中継続とのことだが、今後の企画は？
→10月にはクリント・イーストウッドの監督作品を特集する。
- ・作品選定のアプローチはどのようにしているか
→購入については、弊社側・ライセンサー側、相互に提案してすり合わせる形
- ・競合他社がこの企画を取り上げなかったのはなぜか
→それぞれの編成時の都合や、考え方かと思うが、はっきりとは不明
- ・WB 本体として 100周年を打ち出しているのか？
→世界共通でキャラクターを打ち出したり、パッケージを再発したりなど行っている。
- ・(それほど映画に詳しくない) 一般ユーザーにとって「WB」というのは引きになるのか
→一般の方にはあまりないかもしれないが、映画を観ていけば「WB」のロゴは必ず見かける。
また名作があることは知っている、という人は多い。

・トーキー時代のものも取り上げたら良いのでは。例えば「ジャズ・シンガー」新旧版を並べる、など。

(2)放送企画: 「【4か月連続】Kシネマ GUIDE」

・「ハリウッド映画中心」という看板は変化あるのか？

→比率としてハリウッド映画がメインであることは変わらないが、いい映画はアジアなど広い範囲のものを購入していく。

・韓国映画(ドラマ)は、女性が見ている。ラブストーリーよりアクション系のニーズが多いと感じる。

・原語で楽しむ(字幕)ニーズが高いのか？

→韓国語のセリフ、お気に入りの俳優の声で観たい、というニーズのほうが高い

・「歴史もの」「政治もの」は面白い。今回の編成の中では『シルミド』など。

・今 BS では朝はどこも韓国ドラマ。なぜこんなに流行っていると考えるか。

→韓国では国策として30年程度前からコンテンツに力を入れてきた。その好影響が制作にも現れているのではないかと考える。

・韓国以外の、タイなどのアジア映画についてはどうか？

→今も、タイ、ベトナム、中国、などの作品を放映しており、今後も扱っていく。

<事業者回答>

・頂いたご意見を真摯に受け止め、今後の番組編成の参考にさせていただく。

以上